

オルタナティブ親密圏の構築、そして対抗的公共圏へ

ー 在日フィリピン人支援 NGO を事例として ー

高谷 幸

(日本学術振興会 特別研究員 / 一橋大学社会学研究科)

2010年2月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

アブストラクト

本研究は、在日フィリピン人支援 NGO を事例に、家族とは異なる親密圏がどのように構築されているのかを論じる。次節でみるように、フェミニズムによって家族の抑圧性が批判されて以降、親密圏は否定的に捉えられがちだった。しかし近年、親密圏がもつ抑圧性を踏まえたうえで、なお、それを全否定するのではなく、そこに積極的な意義を見出そうとする試みがなされるようになってきている。このとき、親密圏は家族に限定されるものではなく、「具体的な他者の生への配慮・関心にもとづく関係性」として定義される。しかし一方で、これらの議論では、親密圏がもつポテンシャルが、それを超える範囲にどのように影響を及ぼすのかは十分明らかにされていない。

そこで、本稿ではそうした親密圏がどのように形成され、またそれがどのように公共圏に結びつくのかを明らかにする。具体的には、フィリピン人母子を支援する NGO「カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター」（以下、カラカサンと略）で行ってきた参与観察を手がかりとする。カラカサンは、主に日本人元夫から DV 被害を受けた女性のエンパワメントを目指す NGO である。そこでは、フィリピン人女性にとって家族とは異なるオルタナティブな親密圏が構築され、またそれが対抗的公共圏へとつながっている。その軌跡を辿りながら親密圏の位相と公共圏がどのような関係にあり、公共圏がいかに構築されるのかを明らかにする。

対象となる母子の多くは、日本人男性と結婚したものの DV 被害を受けて離婚・別居した経緯がある。彼女らは、そもそも「日本人との関係」を前提とするナショナルな親密圏で夫からの暴力や排除を経験している。そこでは、女性たちは、ジェンダー、ネーションという二重の抑圧を経験してきた。つまり親密圏は、母子にとって安らぎや地位の安定を与えてくれるものではなく、むしろ抑圧と脅威の場だった。そうした母子にとって何より必要なことは、自尊感情を取り戻すなど自己の回復をはかることのできる親密圏の形成である。次に必要なことは、不安定な生活にたいするサポートであり、親密圏の機能強化が目指される。つまりそこでは、日本における「オルタナティブな家族」の構築が模索されているといえる。それがあってはじめて、「具体的な他者の生への配慮」がなされるという意味で親密圏であると同時に、「他者の前で現われる」という意味で公共圏としての位相をももつ空間で自らの経験を語るができる。カラカサンが重視することは、このような親密圏の再構築なのである。そのうえで、対抗的公共圏に参加するものは、この親密圏における過程を経たものに限られている。このとき対抗的公共圏は、親密圏を基盤として構築されるのである。

2008 年度次世代研究「脱国家化された公共圏／親密圏の可能性 ― 非正規移民支援を事例として ―」（研究代表：高谷幸）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2008 年度プロジェクト時点

高谷幸（徳島大学 非常勤講師 / 移住労働者と連帯する全国ネットワーク）